



経済シリーズ 経済・社会の グローバル化を覗いてみよう!

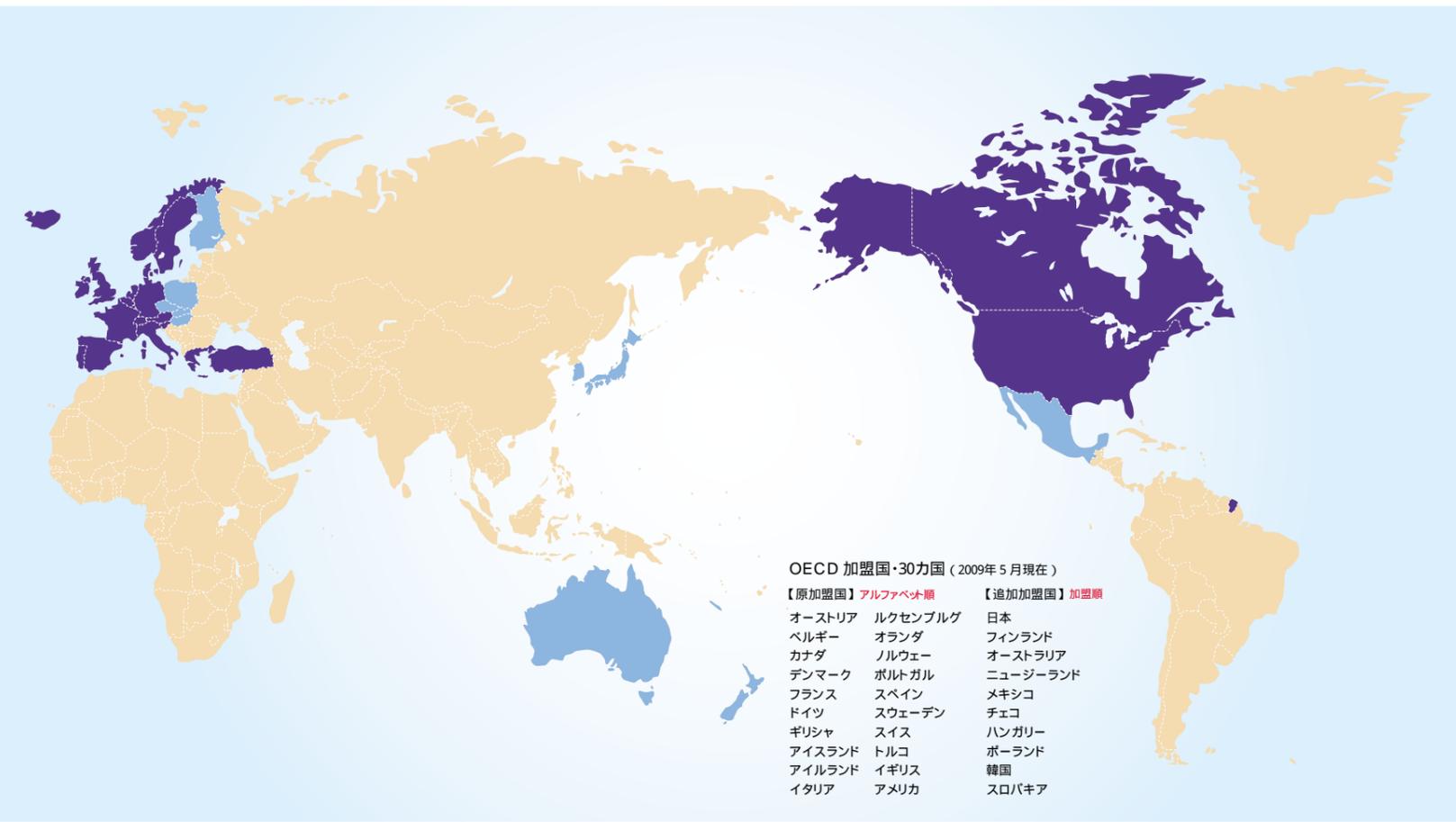
国際機関の世紀とOECD

行いました。また、今年メキシコから世界中に広まった新型インフルエンザへの対応ではWHO(世界保健機関)が毎日のようにニュースに登場していたのが記憶に新しいところです。このように、グローバル化が急速に進展している現在においては、一国あるいは少数の当事国のみでは解決できない問題が非常に増えてきており、国際機関をはじめとする国際的な協力の枠組みの重要性がますます高まっています。

国際機関の起源については諸説ありますが、1831年に設立された「国際河川委員会」を世界最初の国際機関とする説が有力です。その後、20世紀に入って、国際機関の数は急激に増加し、現在では300を超える国際機関が存在すると言われています。また、20世紀には歴史上最も画期的な二つの国際機関、すなわち「国際連盟」と「国際連合」が誕生しました。前者はわずか30年足らずで消滅しましたが、後者は冒頭にも述べたように、創設以来半世紀を経た今もなお、国際社会において欠かすことのできない存在としてその役割を果たし続けています。そのような意味で、20世紀はまさに「国際機関の世紀」と呼ぶにふさわしい世紀だったと言えます。

1 国際関係論においては、「国際機構」という用語を用いるのが通例であるが、「国際」は一般的に「なごみ」や「よい」国際機関という用語を統一して用いる。
2 G8やG20は、常設的な事務局を有しないが、厳密な意味での国際機関とは言えないが、今日の国際的な協力を考える上では欠かせない枠組みである。
3 最上敏樹「国際機構論」東京大学出版会、1999年、1頁。

地球環境、エネルギー、格差と貧困、金融危機、グローバル化した社会が直面する問題は、国際的な協力によって解決される。シリーズ最終回となる今回は、先進国が加盟する「世界の知恵袋」OECDの役割について、平井康夫先生にお話をうかがいます。



時代の要請で生まれたOECD

OECDもまた、「国際機関の世紀」に生まれ、発展してきた国際機関の一つです。皆さんもOECDという名前をニュースや新聞で必ず目にしているはずですが、登場回数はあまり多くないので、記憶に残っている方は少ないかもしれません。正式名称は「経済協力開発機構(Organization for Economic Co-operation and Development)」と言います。OECDは、世界経済のさまざまな局面において重要な役割を果たしている

にもかかわらず、一般の方々に紹介される機会はありません。今回は、数ある国際機関の中から、OECDについて取り上げてみたいと思います。

OECDの前身であるOEEC(欧州経済協力機構)は、1948年4月に西欧の16カ国を加盟国として発足しました。当初は第二次世界大戦により荒廃した西欧諸国に対する米国による援助を加盟国間でどのように配分するかを協議するのが主な役割でした。その後、西欧各国が順調に復興を遂げるに従い、OEECをより時代の要請に応じた国際機構に改組すべきとの



経済学部
平井 康夫 教授
Hirai Yasuo

一橋大学経済学部を卒業後、1989年に大蔵省(現在の財務省)に入省。在職中の1991年にドイツ・バイエルン州にあるアウグスブルク大学に2年間留学。銀行局、国際局等で課長補佐を務めた後、2003年より在スイス日本国大使館一等書記官としてベルンで3年間勤務。帰国後、金融庁で広報室長、コングロマリット室長を経て、2008年7月から長崎大学経済学部教授、国際協力機構論担当。

国際機関の世紀

皆さんは、「国際機関」というと、真っ先に何を思い浮かべますか。おそらく、「国際連合」と答える人が多いのではないかと思います。国際連合は世界のほとんどの国地域を含むが加盟し、その活動分野も非常に広範にわたる。まさに国際機関の中の国際機関とも言える存在として知られています。そして他にも、毎日のニュースや新聞報道にはさまざまな国際機関の名が登場します。サブプライム問題を発端にした世界的な金融危機への対応では、新興経済国の代表を含めたフォーラムであるG20が国際的な協力を推進する上で中心的な役割を果たしたほか、アイスランドやハンガリーなど深刻な危機に陥った国々に対しては、IMF(国際通貨基金)が緊急融資により支援を



OECD本部外観

世界最大のシンクタンク、OECD

OECDの本部はパリにあり、マリー・アントワネット王妃も2年ほど過ごしたと言われている、かつてのフランス王室の宮殿に所在しています。その建物は、OECDが持ち続けてきた地味で欧州的な特色を象徴するような独特な雰囲気を持っています。OECDは、①経済成長、②貿易自由化、

4 1949年に西ドイツ、1958年にスイスが加盟し、OEECは最終的には18カ国構成となった。

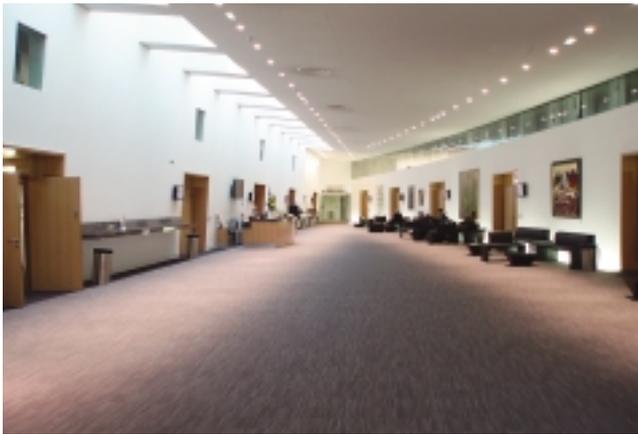


正面ロビーに設置された加盟30カ国の国旗

③ 途上国支援に貢献することを3大目的として設立されましたが、その後、国際社会・経済の多様化に伴いその活動範囲を広げ、現在では当初の目的に加え、環境エネルギー、農林水産、科学技術、教育、高齢化、年金・健康保険制度といった経済・社会の広範な分野で積極的な活動を行っています。

OECDには、他の国際機関との違いを際立たせるいくつかの特徴があります。まず第1の特徴として挙げられるのは、先進国のみを加盟国としている点です。OECDに加盟するための資格要件を定めた明文上の規定はありませんが、加盟のためには、① 民主主義体制の確立と② 市場経済体制

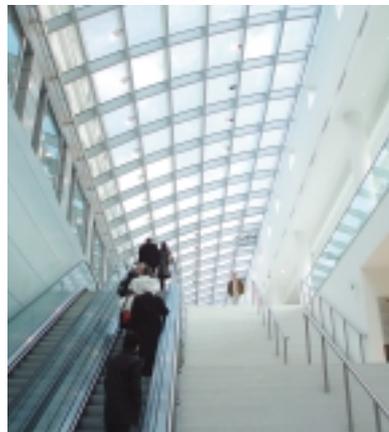
の下で先進国の水準に達していることが実質的に求められており、OECDに加盟すること自体が、「先進国である証」として一種のステータスとなっています。ちなみに、日本がOECDに加盟したのは1964年のことですが、これにより、日本は名実ともに先進国の仲間入りを果たすこととなりました。第2の特徴は、「世界最大のシンクタンク」と称されるとおり、政治・軍事を除き、経済・社会のあらゆる分野のさまざまな問題を取り上げ、研究・分析し、政策提言を行っており、活動対象分野が非常に幅広いことが挙げられます。第3の特徴は他の国際機関のように、各国間で対立のある問題について利害調整を図る場ではなく、



数多くの会議場を擁した OECD 本部

先進国という同質集団の中で、多様な問題に関して政策協調を図るためのフォーラムであり、いわば「クラブ的」性格を有していることです。

5 村田良平「OECD（経済協力開発機構）」中公新書 2000年、3頁。



近代的な内部



会議場のひとつ

日本は、OECDに対し、加盟国中、米国に次ぐ第2位の拠出（2007年で約61億円、全拠出額の約17%）を行い、財政面で多大な貢献をしています。またOECDのリーダー国の一つとして各種活動に積極的に参加・協力し、日本はOECDにとって欠かすことのできない重要な存在となっています。一方、OECDが行っているさまざまな調査研究や政策協調の成果は、日本政府が、経済・社会の広範な分野において、新しい政策を企画・立案する際に役立てられています。

OECDが活動対象とする分野はその幅広さゆえに、他の国際機関と重複するところが多く、またその活動の性格上、「不要論」は絶えません。G8サミットで議論される議題に関する説明資料の多くをOECDが準備するなど、OECDがG8サミットの知恵袋として重要な役割を果たしていることは意外に知られていません。OECDは、国際社会が気付いていない将来の重要課題を「未来志向」で取り上げていく貴重な存在であり、私たちは今後ともその活動に注目していく必要があります。



OECDと日本